



Title	目で見るWHO 第95号 表紙・目次等
Author(s)	金子, 明
Citation	目で見るWHO. 2026, 95, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104516
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

目で見る WHO

2026 冬号 
No.95

Visual Journal of Friends of WHO Japan



公益社団法人

日本WHO協会

CONTENTS

P1	ごあいさつ	金子 明
P2	巻頭特集	
	マスギャザリングにおける感染症対策	白野 倫徳
P6	セミナー・イベント報告	エレーラ・ルルデス
	JAGH-Sセミナー 周産期のメンタルヘルス：	笠井 靖代
	国際保健の視点から考える日本の現状と課題	山崎 蒼空
P10	関西グローバルヘルス(KGH)の集い	
	オンラインセミナー特別企画 世界と関西の保健医療を変える力	中村 安秀
	～日本WHO協会×JICA海外協力隊ともに60周年の集い～	藤田 さやか
P14	NGO・団体紹介	
	保健・医療と外国籍住民をつなぐ チャンネルを太く、細やかに	青木 理恵子
P16	国際保健を学べる大学・大学院	
	1. 神奈川県立保健福祉大学ヘルスイノベーション研究科	鄭 雄一
	2. 三重大学医学部看護学科	谷村 晋
P20	留学生日記	
	公衆衛生を「学ぶ」から「実践する」へ メルボルンでの経験を通じて	石田 茉莉絵
P22	WHO職員日記	
	—加盟国会議(RCM)を終えて—	堤 敦朗
P24	WHOニュース 7月／8月／9月	林 正幸
		渡部 雄一
P30	世界禁煙デーのイエローグリーンライトアップ：	野上 浩志
	受動喫煙のない日本への願い(再掲載)	
P32	日本WHO協会60周年記念 歩み/活動	
P34	WHO憲章	
P36	WHOの地域事務局と加盟国	
P37	寄付者のご芳名／編集委員のページ	安田 直史
P38	入会案内	

ごあいさつ



日本WHO協会 理事
カロリンスカ研究所 教授
大阪公立大学 大阪国際感染症研究センター /
大学院医学研究科 特任教授

金子 明 (かねこ あきら)

1955年開始の世界マラリア根絶計画は、DDT室内残留噴霧に依存したものでしたが、「魔法の弾丸はない」という教訓を残し1969年に終焉しました。本計画には熱帯アフリカ諸国は含まれませんでした。その後マラリア死者数が増え続け「根絶」に言及することがタブーとなっていた1987年9月、私は初めてバヌアツの地を踏みしました。WHO/WPROのマラリア専門家(Malariologist)として首都ポートビラの小さなWHO事務所に赴任したのです。バヌアツには約120の言語がありますが、当時の人口は15万人で68の島に居住していました。年間マラリア発症者数は人口千人あたり200を超え、死者は20名ほどであり、現在の熱帯アフリカに匹敵する流行が続いていました。

赴任後しばらくして、WHO短期コンサルタントのサキヤ医師とペンテコスト島に調査にでかけました。このバヌアツ東部の人口1万人弱の島は、伝統儀式としてのバンジージャンプ発祥の地であり、1980年英仏からの独立を成し遂げたりニ初代大統領出身の島です。到着後メルシッ村のカトリック教会に泊めてもらう事になり、そこで夕飯の前にkava?にと誘われました。草ぶきの小屋ナガマールで、島の若者が大きなショウガ様の植物の根部をサンゴの棍棒ですり潰し絞り出したkavaをヤシの実カップになみなみと注いでくれました。躊躇してそれを一気に飲み干すと、孤立した集落で平和に素朴に生きる人々のメラネシア世界に魅了されていきました。ノーベル賞作家であるル・クレシオが独立前のニュー

ヘブリデス旅行記「ラガ：見えない大陸への接近」のなかで「ラガには植物の魔法がある」と描写してkavaが紹介されています。ラガはペンテコスト島で話されている言語のことです。

バヌアツ赴任前の1985-87年、私はJICAの技協「北スマトラ地域保健プロジェクト」にマラリア専門家として参画し、中村理事長らとアサハンの海岸村インドラプーラで同じ釜の飯を食べていました。そこでの経験とインドネシア研究者との議論から私はマラリア撲滅戦略について、当時一つの仮説を抱いていました。バヌアツの隔絶された小さな島嶼コミュニティはそれを検証する絶好の場所でした。1994年までのバヌアツ赴任中、最南端のアネイチュウム島にてマラリア撲滅に向けた介入研究を開始し、高い住民参加があれば計画された短期集団投薬と維持可能な媒介蚊対策により島嶼からマラリアを撲滅させうることを四半世紀かけて実証することができました [Kaneko A, et al. Malaria eradication on island. Lancet 2000]。この研究は2000年ころから再びマラリア根絶に向けて動き出した国際社会にその概念を提示し、住民参加の重要性とともに対象地の地域特性を把握したうえで新たな技術も含めた対策法を有機的に連携させる統合戦略の必要性を示したものでした。現在手掛けている熱帯アフリカにおいてはマラリア撲滅に向けて歴史上初めてのワクチン(RTS/S、R21)導入が進んでいますが、住民主導の多角的統合戦略はその重要な基盤になり、今後の展開が大いに期待されるものであります。

2026年1月